攻勢の応酬続くウクライナの冬

拓殖大学非常勤講師
伊藤嘉彦
いとう　よしひこ　大東文化大学及び独イェーナ大学博士前期課程卒。拓殖大学大学院国際協力学研究科博士課程修了。博士（安全保障）。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まってから、あと数週間で一年を迎える。二二年三月下旬にはロシアとウクライナによる停戦交渉が行われたが、侵攻停止に結び付くことはなかった。その後、ウクライナは八月下旬から反撃に転じ、ハルキウ州およびヘルソン州西岸地域を回復した。冬を迎えて両国ともに人も装備も疲弊する状況にもかかわらず戦闘は激化しており、今年一月に入って戦線が大きく変化している地域もある。

ロシア軍によるバフムト攻勢

ロシア軍はドネツク州の都市バフムトで連日にわたる攻勢を実施。一月一五日の時点で、ロシア軍は街の東部にある工業地帯を確保している。また数ヵ月にわたって攻撃を実施してきた同市北東のバフムツケでウクライナ軍を撤退に追い込み、さらに北西に進んでソレダーで戦闘になっている。ソレダー郊外には南北に幹線道路Ｔ０５１３号線が走っており、これを北方に抜ければシベルスクに、南方に抜ければバフムトに到達する。数ヵ月前は、シベルスク―ソレダー―バフムトの線でウクライナ軍に攻撃を撃退されていたが、今回はこの一角に楔を打ち込む形となった。仮にロシア軍が北方のシベルスク方面に動いて成功した場合、スピルネおよびヴェゼレ周辺のウクライナ軍に対して包囲環を形成するように動くことになる。

東部ではスバトヴェ―クラスノリチェンスケ―クレミンナの線を結ぶ幹線道路Ｐ６６号線とこれにほぼ並行して南北に流れているクラスナ川周辺を確保。ドネツク市北部の地域ではウクライナ軍が確保する町アウディイフカを包囲するように数回の攻撃を実施しているが、いずれもウクライナ軍に撃退されている。ロシア軍はルハンシク州のビロホリフカからドネツク市西方のマリンカ周辺まで広範囲に

連日にわたって攻勢を実施していたが、今年一月になってバフムト周辺で掌握地を広げた。

ウクライナの東部奪還は停滞気味

ウクライナ軍は一一月にヘルソン州の州都ヘルソンとドニプロ川西岸の被占領地を奪還したが、ヘルソン州内のドニプロ川に架かる主要な橋は損壊によって使用できないため、同州東岸への攻勢には移っていない。このためドニプロ川を天然の堀として戦線を固定しつつ、一部部隊が中州の奪還に着手している。

東部のウクライナ軍はルハンシク州の町クレミンナ郊外まで達しており、一二月二三日にはクレミンナ西方の町ディブロバを迂回するように移動してクレミンナ北西を走るＰ６６号線の交通に干渉できる位置で戦線を構築した。他方、クレミンナ西方に展開する別働部隊はディブロバを南方に迂回してセレビャンスク森林地帯を東進し、クレミンナ外縁まで数キロのところまで到達した。結果としてウクライナ軍はクレミンナ西方でロシア軍に対してディブロバを頂点とした半包囲環を形成した。しかし一月一五日の段階でロシア軍はクレミンナ西方をある程度維持しており、ロシア軍にクレミンナ市街へ向けた後退を強いることができるかは不透明な状況にある。

一月五日、フランスのマクロン大統領はゼレンスキー大統領と電話会談を行って装輪装甲車の供与を伝え、七日には米国およびドイツが歩兵戦闘車の供与などを発表、ここに西側諸国は近接戦闘に従事する戦闘車両の供与に踏み切ることとなった。ウクライナへは東欧諸国から旧ソ連製の戦車が多数供与されているが、一月一四日、イギリスのスナク首相はゼレンスキー大統領と電話会談を行い、主力戦車供与の意向を伝えた。一連の追加支援は、「ウクライナがより優勢となり、戦争に勝利できる」（スナク首相）ことを目標にしているが、戦闘の継続に他国の支援が必要である状況の裏返しでもある。

ゼレンスキー大統領は訪米に際して行われた上下両院合同会議での演説において「決して降伏しない」と発言してロシアに対する対決姿勢を維持する一方、プーチン大統領は二二年の大みそかに行った演説で、併合したウクライナの四州をロシアの「歴史的領土」と位置付け、新年には「祖国の防衛は神聖な義務」と表現し、撤退の意思がないことを鮮明にした。つまり両者が講和の席につく前提が成立していない。双方が一定の戦果を上げる状況が続けば、講和の成立条件もより複雑になってくるだろう。●